

新たな都市農業の胎動 「体験農園への挑戦」

—日本農業の新たなシステムを模索する白石好孝さん

今、都市農業が食料・農業・環境の表舞台で脚光を浴びようとしている。これまで、東京の農業は都市における土地価格を高騰させている張本人として見られ、農地の宅地化、工業用地への転用のための法整備の対象となっていた。すなわち、都市農業は食料の担い手として注目されることはなく、もっぱら宅地の供給者として見られてきた。しかしここ数年、都市農業が持つ様々な機能を見直し、都会で農業が存在することの重要性を積極的に評価しようという動きが加速化しつつある。

こうした都市農業が脚光を浴びる陰で大きな役割を果たしてきたのが、白石好孝さんと加藤義松さんを中心とする練馬区の農家グループである。彼らが中心となって発想し、都市農業の新しい可能性を拓いた「体験農園」の基本思想と、その方法を白石さんに伺った。

トトロのような純農村・練馬で育った私の少年時代

「住民の大部分が農家で見事な農地が続いていました。」と



少年のような眼で夢を語る白石さん

りのトトロ』で描かれた農村そのものでした。関東の水田のある農村は、川に沿って水田があって、高台のところに原野を切り拓いた畑地があって、中間の南向きの斜面に家が建っていました。雑木林を中心とした里山もありました。比較的面積が大きい畑では、おかぼ（陸稻）、麦や練馬大根を中心とした野菜類がつくられていました。

また、西武池袋線や西武新宿線で人が通勤する合間を縫って、貨物列車が行ったり来たりしていました。貨物列車は秩父からセメントを運んで、帰りは東京の人びとの下肥を運んで農村で降ろしていきました。

私は農家の長男でしたから祖母から『家の跡を継ぐんだよ』と言われ続けて育ちました。中学を卒業して杉並にある農業高校に進学しましたが、卒業後に家の農業を継ぐことに何の疑問も感じませんでした。そういう意味では、農業を世襲制でやってきた最後の世代なのかもしれません。周りの農家でも多かれ少なかれそうでした。都市化の中で家の農業を守ってきた東京の農家は意外と保守的です。開かれた考えを持っていたら、都市化の中で農業をやめていってしまったでしょうね。そういう意味では、頑固な農家によって都市近郊の農地が守られてきたのです。昭和30年代から高度経済成長が続き、急速に周辺の農地が消え宅地化していきました。高校時代

の私は、都市化の波を強く感じて、ここでは農業ができないと思っていました。もし農業をするのであれば、地方で大規模で効率よくやるか、集約型の施設栽培のいずれかしかないと考えていました。」

白石さんは東京農業大学を卒業していますが、どのような夢や目的をもって農大に進学し、どのような勉強をしたのですか。

東京農大への進学は現実逃避、 学生時代は自分の好きなことをしました

「正直、東京農大に進学したのは現実逃避です。実は農業高校へ行きながら最先端の花農家でアルバイトをしていました。しかし、最先端の技術を使っているといっても朝から晩まで鉢あげの連続です。こういう仕事を一生やっていく農業に疑問を感じました。家を継ぐまでに考える時間が欲しくなり、大学に進学しました。東京農大では農学科の蔬菜研究室にいましたが、卒論は文学を教えていた教授のところで書きました。本当は、文学部に進学したかったのです。宮沢賢治に憧れ自分で詩を書いてガリ版刷の詩集を制作して300円でみんなに売ったり

していました。サークルでは歌の会に入り、労働歌やロシア民謡を中心とした歌声運動に参加しました。

大学時代は家の農業を継ぐことは全く考えずにとにかく学生時代を楽しみました。大学2年から全国放浪の旅が始まりました。卒論指導の先生から四国の宇和島に『親民鑑月集』という日本の農業の教科書としてはもっとも古い文献があるという話を聞いて、卒論の対象として調査することをお願いしました。実は、四国の宇和島に旅ができるという不純な動機でした。」



一昔前の都会はこのような農村だった

随分と学生生活を楽しんだようですね。これだけ楽しめば、家に帰って農業をやろうという気持ちになれたのではないのでしょうか。また、家に帰ってどのような農業をやろうと当時は考えていたのですか。

夢は畑の幼稚園を経営すること

「ところが、すぐには家に帰りませんでした。まだ、ふんざりがつかなかったのです。卒業から家の農業を継ぐまでの1年間は、北海道の旭川にいました。夏の間はユースホテルで、冬は電気工事のアルバイトをしていました。冬の旭川での電気工事は寒かったですね。こんなところでちゃらんぼらんしていても仕方がないので家業を継ごうと1年後に家に戻りました。当時の我が家では、キャベツの契約栽培をしていました。

都市で農業を継続するには固定資産税を中心に様々な費用がかかります。農地を手放さないで、それを払うのは本当に大変です。私の家でも農業収入だけで固定資産税を払うことができないので、道路の拡張で提供した農地の販売代金を預金しておいて、それを毎年取り崩しながら固定資産税を払っていました。

卒業して1年後に家に帰り経営の帳簿を見て、これが経営といえるのかなと疑問に思いました。当時は、高度成長期で時代は大きく動いていました。そうした中で、自分だけが時代から取り残されているような恐怖感がありました。そのため、簿記の学校に通ったりしました。友人と2人で1ヵ月間オランダを訪ね、レンタカーでヨーロッパ中の農業を見て回りました。帰国後、友人が会社を興すというのを聞いて、それに引き替え自分は何も考えていないことに非常にショックを受けました。

それからは真剣に自分にあった農業を考えました。さんざん考えたあげくの結論が『人と接することが大好きな自分には、人と接する農業しかない』というものでした。特に農業を人に教えたいと思い、畑のある幼稚園か



人と接する農業が夢であった

保育園を経営しようと考え、通信教育で幼稚園の教員免許を取りました。免許は取ったのですが、幼稚園はすでに近所で開園していたので、それなら保育園をやろうと考え、保父の資格にチャレンジしました。そして、社会福祉法人を作ることになりました。当時は農業教育とか食農教育などといった考え方が全くなかった時代です。そういう意味では、私は時代の最先端を走ろうとしていたのです。保父試験にもほぼ合格して、いよいよ開園という段階になりました。しかし、区役所から開園しても子どもが集まらないので保育園の運営は難しいという判断が下されてしまい、断念せざるを得ませんでした。」

畑の幼稚園・保育園の夢をあきらめることは非常につらかったでしょうね。しかし、立ち直りが早く、アイディアマンの白石さんのことから、次のチャレンジ目標を見つけるのも早かったのではないのでしょうか。

畑の幼稚園から直売農業への転換

「その後、縁あって結婚しました。妻は当時幼稚園の先生をしていましたが、すっぱりとやめて農業に従事してくれました。妻とはいずれ畑の幼稚園を開園しようと話し合っていました。しかし、夫婦で農業をしているうちに次第に農業の面白さがわかるようになりました。特に、市場出荷からスーパーへの直接販売や直売所での直



直売に挑戦

売に切り替えたことにより、消費者と一体となった農業の面白さを感じるようになりました。また、こうした新しい販売のための生産は父親とは独立してできましたので、経営としても興味ももてるようになりました。自分の工夫次第で収益が上がるし、20年以上前ですがスーパーで自分の顔写真を入れて野菜が売り出されているのを見て感動しました。



本当は使いたくなかった農産物の自動販売機

鮮度の管理、核家族向けの小さな分量での出荷、根付きほうれんそうの販売、ダンボールや包装紙などの出荷資材を使わない販売など、消費者の反応が直に伝わる都市農業ならではの楽しい経営になりました。それとともに生産のほうもキャベツから小松菜やほうれんそうなどの葉ものを中心に変わっていきました。これ

によって通帳に目に見えてきっちりと利益が残っていくので面白くなってきました。

従来の卸売市場出荷をした農業では常に上から指導され自由がありません。農業の最大の魅力は、自由に経営ができるということにあるはずで。こうした試行錯誤の中から、市場とは違う形の評価が得られる農業をやりたいと思うようになりました。当時、母親が家庭菜園で作った食べきれないトマトやきゅうりを一輪車にのせて近所で販売し、私たちが昼寝をしている間に1万円近くの売上げを出すようになったので、この直売野菜を次第に増やすようになりました。そのうち消

費者が求める枝豆や旬の野菜も作るようになり、家の前に直売店を開いて売り始めたら飛ぶように売れました。また、学校給食への野菜の供給を15～16年前から始めました。確実に私の野菜が給食メニューに取り入れられています。』

こうした消費者の反応を毎日体感できる農業をしているうちに、白石さんは都市農業の大きな可能性に気がつき、親友で同じく練馬区で専業農家をしている加藤義松さんとともに「体験農園」に挑戦することになる。体験農園に挑戦するきっかけを白石さんは、次のように語ってくれた。

新しい都市農業の形を真剣に考えた生産緑地法の施行

「都市農業の将来を規定したのが生産緑地法です。この法律では、生産緑地の指定を受けると30年間は営農を続けなければなりません。すなわち農地を農地以外に転用してはいけないという制度です。30年間農業を持続するというのは実に大変です。都市近郊農業を否定し、農地を宅地や工業用地に放出するのを促進するような法律です。そのため、この住宅地のご真ん中で30年間農業を持続できる方法を真剣に考えました。当時、私は農協青年部の東京委員長として宅地並み課税反対運動を展開しました。また、生産緑地法制定以降は、この法律を徹底的に研究して東京では農業を選択する方が得であるという結論に達し、生産緑地に乗ろうという運動を展開しました。農協と意見が分かれたこともありました。今振り返っても、この選択は間違っていなかったと自信を持って言えます。」

体験農園のアイディアは、どのようにして出てきたのですか。



体験農園にチャレンジ

体験農園への挑戦

「生産緑地法の改定があった平成3年当時はバブルがはじけ始めた時でした。市民農園がはやり、グルメブームになっていました。本当に美味しいものを求めて、有名シェフがこぞって素材にこだわりだしたのです。この時、農業が評価される時代になってきたと強く感じ、農業の未来に漠然とした光を見出したのです。

こうした状況下で、親しい友人で練馬区で都市農業を実践している加藤義松さんと、これからの農業の方向性について話し合いました。この時、加藤さんは市民農園は消費者が勝手に野菜を作っているため、上手な人もいれば下手な人もいます。野菜だけ雑草だけかわからないものを作っている人もいます。もし、自分だったら畑をきちんと区割りして、とうもろこし、枝豆、トマト、きゅうりなどを契約栽培にして、土おこし、畦たて、種まき、草取り、肥料まき、収穫など、野菜作りの仕方も指導して、収穫された物を消費者が自分で消費できるようにする。こうした指導料も含めて会費を集めるような農業ができな



プロと同じ野菜が作れる体験農園

いかというアイデアを出しました。

私もこの話を聞いて非常に面白く、都市農業の新しい形であると思いました。すぐに、加藤さんとともに区役所に要望書を出しました。市民農園は、区役所が農家からほぼ無償で土地を借りて、行政サービスとして実施していました。管理も区役所でやっています。体験農園ならば、管理まで農家がやるので区役所の負担はほとんどありません。農家が行政に代わって市民農園をやるから補助金をつけてほしいと要請しました。

すぐに、加藤さんを中心に体験農園研究会を作りました。そして、すでに行われていた体験農園方式のメリット・デメリットを研究し、農家と体験農園参加者のふれ合いや交流、そしてきめ細かな指導、多様な野菜の生産を特徴とする練馬方式と呼ばれる体験農園のシステムを構想して出発したのです。

体験農園に対する利用者の満足度は非常に高く、現在練馬区では10戸の農家が体験農園を実施しています。また、加藤さんを会長に体験農園園主会という組織を結成して、相互に緊密な情報交換をしております。東京農大の国際バイオビジネス学専攻の大学院生の山田崇裕君にこの10農園の利用者の満足度および意向調査をお願いしました。その結果を見ますと、練馬区の体験農園に対する消費者の満足度は非常に高く、また農園ごとに満足度の差がほとんどないことが明らかになりました。この調査結果から私たちの試みが正しかったことを強く確認しました。」

体験農園には様々な人びとが参加しているが、かなり高学歴の人たちが参加するとともに、農産物の安全性に対する意識がとて強い人も参加している。市民農園を経験した参加者には、無農薬や無化学肥料で野菜を生産した経験を持つ人も多い。体験農園では、必要最小限の農薬や化学肥料を利用している。また、生産する作物は全て園主の方で決定し、参加者は決められた作

付計画に従って農作業をしている。こうした点で、園主と利用者の意見の食い違いや問題が発生しないのだろうか、またどのようにしてこうした問題を解決しているのかを聞いてみた。

消費者の安全性意識と体験農園



消費者の笑顔が最高のはげみ

「参加者と園主の軋轢(あつれき)は極めて少ないです。参加者の多くは、野菜の栽培に関する実践的知識は全くありません。確かに、参加者の8～9割は無農薬で野菜を作りたがります。私は否定はしません。しかし、1回目の講習会では

肥料と農薬についての講習

習を徹底的に行います。有機栽培でやるとどうなるかを説明するとともに、堆肥づくりを経験してもらいます。しかし、参加者自らが堆肥をつくることはできません。また、毎日畑に来て野菜を見て虫や病気の発生を防ぐこともできません。

そのため、できるだけ安全で土に配慮した肥料を使います。うちでは、有機肥料が6割、化学肥料を4割使用しています。農薬の利用については、参加者の自主判断に任せています。しかし、まったく無農薬で作るのは極めて難しいのと、害虫だらけの野菜を食べることへの抵抗感から、参加者の多くは安全性を考慮しながら必要最小限の農薬を使っています。除草剤は一切使いません。体験農園では、栽培法について参加者が自分の責任で選択できる複数の選択肢を準備しておくことが重要と考えます。」



プロも顔負けの農産物ができたよ

体験農園は、農家、消費者、そして行政にとっても大きなメリットをもたらす市民参加型都市農業の新しい試みである。また、体験農園のもつ可能性は決して都市近郊だけに止まるものではなく、消費者参加型の新たな日本農業の創造という点で大きな役割を果たしていくことが期待できる。体験農園の普及に関する夢を白石さんは次のように語ってくれた。

体験農園のノウハウを フランチャイズで活用

「練馬区で推進している体験農園のノウハウをさらに蓄積して、その運営のコツをマニュアル化して普及することができれば、体験農園を全国の農村に広げることができます。すなわち、園主の個性でやる部分と、しっかりとしたマニュアルをもとにシステム化した部分を明確に仕分けて整理することが大切です。しゃべることが苦手な農家は、その技術力で参加者を感動させることができます。また、参加者の中には仕事の中で獲得した素晴らしい能力やネットワークを持っている方もいます。そして、自分の農園だけでなく他の地域の農家と連携をとって多様な農業にチャレンジできるようにしている園主もいます。参加者と園主で海外調査を行った農園もあります。

こうした体験農園のネットワークを全国に広げるのが私の夢です。」

(聞き手：門間敏幸)